

～未来を見据えた名古屋の教育とは～

これからの教育が進むべき方向とそのために必要なこと

「名古屋が目指す教育の在り方とは」「そのためには何をすべきか」。国内の現状と課題を分析しながら、教育の未来像を、国内でもトップの実績と経験をもつ独立行政法人教職員支援機構荒瀬克己理事長を迎え、名古屋市 坪田知広 教育長が意見交換。名古屋ならではの教育について、貴重なお話をいただきました。

教育の現状と課題、 方向性について

坪田教育長(以下、坪田)

はじめに、中央教育審議会(以下、中教審)会長であり、独立行政法人教職員支援機構理事長の立場から、教育の現状と課題、方向性について基本的なことを教えていただければと思います。

荒瀬 克己 氏

独立行政法人
教職員支援機構 理事長



荒瀬理事長(以下、荒瀬)

ご承知のように、中教審が令和3年に答申した『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、子ども一人ひとりを「自立した学習者」に育てることの重要性が述べられています。自分で考え、判断して行動する、振り返ってよりよく調整する、また、必要に応じて他者と協働する、そういった能力、あるいはそうしようとする意思を持つ人に育てたいということです。

そのためには、学習指導要領に基づいて、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、主体的・対話的で深い学びを実現していくことが求められます。

教職員には、子ども一人ひとりの学びを支える伴走者としての役割が期待されます。子どもが主体的に学び、学び合う学校をつくるために、教職員が学び、学び合うことが必要です。

坪田

今の不確定、不透明な時代に「自分で考えられる力が重要である」ということを多くの人が理解し始めていると思います。それらは、主体性や自律と呼ばれ、学校での学び方が変わり始めています。一方で、やはり知識も大切ではないでしょうか。

1週間の限られた時間のなかで、知識も大切にしながら試行錯誤・話し合い・体験に時間を割くことができるのかという疑問が浮かびます。

2021年4月独立行政法人教職員支援機構理事長に就任。

2023年3月に第12期中央教育審議会会長に就任。

京都市立堀川高校校長、京都市教育委員会教育企画監、大谷大学文学部教授、関西国際大学学長補佐を経て現職。ほかに兵庫教育大学理事、福井大学教職大学院客員教授などを務めた。

堀川高校在職時、「課題探究型の学習」を導入し、生徒が学びたいことを自ら学ぶ取り組みを支える学校改革を進めた。



荒瀬

工夫が必要だと思います。カリキュラムオーバーロード(教育課程の過積載)は、学習コンテンツを減らせば解消できるとは必ずしも言えませんが、相互の関連性や順序についても考え、効率よく学べるようにする工夫をしなければなりません。

同時に、どういう力がこれからの時代を生きるために重要かを考えて、そのための学習を丁寧に組み立てることが求められます。

単元内自由進度学習の取り組みが各地で進められています。子どもに学びが委ねられ、試行錯誤できることが重要だと思います。

そういった子どもの学びに価値を見出すためには、指導する教員側がその価値を理解できるための経験が大切です。今は、過渡期と言えるでしょう。

「子どもを主体にする学びの実現」が重要とわかりながらも、子どもたちは先生が仕組んだストーリーのなかでの行動になりがちです。決められたグループ内での話し合いや子どもたちの行動を制限するような話し合いは、教員のコントロール下での作業とも言えます。

名古屋市立学校では、一人で考える、話し相手を選ぶなど自由に学べる取り組みをしようとしています。こういった学びが広がることが大切です。

坪田

荒瀬中教審会長のもとでの議論は、過渡期を乗り越えていくものと期待しております。さまざまな既成概念を乗り越える秘訣などがありますか？

荒瀬

難しい問題ですが、実践を通して気づくことがいちばん大事であるように思います。

単元内自由進度学習など複線型の学びを展開している校長先生とお話しして、とても興味深いことを伺いました。その学校では、子どもにとってどんな学びがいいかと考え続けただけで、複線型の学習を実施しようと思っていたわけではなかった、結果としてこうなっただけだ、ということでした。

子どもたちが有能な学び手であることを信じて、学びを子どもに委ねていく。そうすると、気づくことがいっぱい出てくる、というのでしょうか。

その前提になるのは信頼関係です。子どもと先生、子ども同士、先生同士、保護者と先生、それらが信頼関係の中で繋がっていることが重要です。



坪田 知広

名古屋市教育長

前述の取り組みを進めている学校でも、こういった信頼関係が築かれているのだと思います。

やってみることの大切さを感じます。エビデンスということがよく言われます。しかし、初めてやることには、エビデンスは用意できません。エビデンスは必要ないとは言いませんが、「エビデンスがないとできない」というのは、「しない」ということになります。

もちろん教育ですから、賭けをすることはできませんが、慎重に、誠実に、丁寧に準備をして、少しずつやってみる、振り返って改善を続ける、こういったことが大切だと思います。

子どもを主語にした 学校教育

坪田

(計画の中で使われている)「ラーニング・ダイバーシティ」という言葉は造語なのですが、名古屋で使い始めたところ、ようやく浸透してきました。

荒瀬

とてもよい言葉ですね。「ラーニング・ダイバーシティ」という言葉を大都市である名古屋が全面的に出していかれ、全国に広がっていくことを期待します。また、キャリア教育も、とても大事なことだと思っています。「ここで何がしたいのか」「どのような大人になりたいのか」と明確に提案しておられるのは、非常によいことだと思います。



「社会のなかで自分の役割を果たしながら、自分らしく生きていく」というのがキャリアです。この言葉は、学制150年記念式典での天皇陛下のお言葉にもありました。「一人ひとりを大切にする」ということが我が国の目指す教育で、「自分らしく生きていく」ことが大事にされる教育の発展を祈るというものでした。

「自分を大事にしていくとは」「自分らしさとは」「どんな大人になっていくのか」などの言葉を自分自身に問いかけて考えるのは大切だと思います。それを発信していこうとしておられる名古屋は素晴らしいです。

坪田

私も視察に行ったことがあります。名古屋の姉妹友好都市であるロサンゼルスには、高校受験がなく、近く的高等学校に行ける制度のなかで、色々なキャリアを学び、就職や大学進学をしています。

「キャリア教育」という言葉は、これまで何度も盛り上がってきたものの、浸透していないのは事実です。名古屋には協力していただける企業も多くありますので、一貫したキャリア教育を浸透させていきたいと意気込んでいます。

また、特別支援学校の高等部を令和6年4月に若宮商業高校と合築した併設型で作り、部活動なども一緒にやるような取り組みも進めていきます。

言葉だけではなく、なんでもやってみることが重要なので、名古屋を「とりあえずやってみる都市」にしていきたいと考えています。

荒瀬

とても素晴らしいお話だと思います。

いま中教審で高等学校教育について、生徒の希望によって、全日制、定時制、通信制の垣根を乗り越えて行き来できるようにしてはどうかといったことを議論しています。こういったことについても、また、教師が専門職性を高めるための学びの時間の確保が保障されるといったことについても、ぜひお考えいただきたいです。

中教審の「令和の日本型学校教育」の答申は、「子どもを主語にした学校教育」を提唱しています。学びの主体である子どもの意思を尊重し、それぞれの事情に即して、学びが可変性のあるものにできたらよいと考えます。その学びを支えるためにも、教職員にさまざまに学べる機会が必要です。

名古屋ならではの 多様で多彩な取り組みへ

荒瀬

「とりあえずやってみる」といったしなやかなお考えに基づいて、ラーニング・ダイバーシティが実質化していくことをご期待申したいと思っています。釈迦に説法で恐縮ですが、子どもに視点を置き、子どもの視点に立って、豊かな学びの実現を図ってくださるようお願いしたいと考えます。先ほどから教育長がおっしゃられたことを、ぜひ実現してってください。他の大都市圏にとっても大いに参考になるのではないのでしょうか。

坪田

最後に、学習指導要領の内容削減や教職員定数制度、教員免許制度などに手をつける大改革の動きになっていくのでしょうか。

荒瀬

現時点で確定的なことを申し上げることはできませんが、学習指導要領の何を継続し、何を变えるのかは慎重に考えて進めることが重要ですね。

また、教職員の定数について、例えばどうでしょう。教員の定数の2割増しで採用・配置すると、子どもの学習も充実しますし、教員も学ぶ時間が確保できます。さらには、幅広く学ぶためのサバティカルのような休暇制度なども実現すると素晴らしいと思います。

坪田

名古屋でたくさんのチャレンジをしていきたいです。

荒瀬

ぜひお願いします。名古屋には初等中等教育段階のすべての学校がありますから、名古屋ならではの多様で多彩なお取り組みをご期待しています。

坪田

今後も、見守っていただけるとうれしいです。

本日は、ありがとうございました。

